博士論文審査及び学力の確認の結果（別紙）

今澤浩二「ケマルパシャザーデ・ターリヒ第４部ーーー研究と校訂ーーー」

審査委員（主査）　新　井　政　美

本論文は、16世紀前半に書かれたオスマン朝年代記「ケマルパシャザーデ・ターリヒ」の第４部の研究と校訂並びに注解である。当年代記は完成後長年にわたって忘れ去られてきた。それはおそらく、同時期に執筆された「八つの天国」と題されるペルシア語による年代記が、オスマン教養人の間で尊重され、引用されてきたからであろうと思われる。当年代記の価値が認識されたのは、1954年にトルコ人研究者トゥラン氏によって第７部の校訂版が出版されてからのことである。以後、現在までにトゥラン氏によって第１部（1970年）、及び第２部（1983年）が校訂・出版され、1996年には同じくトルコ人研究者セヴェルジャン氏によって第10部の校訂版が出版された。しかしそれ以外の研究は遅れ、1970年代から1980年代初頭にかけてウウル氏が第８部と第９部とについて紹介を行なったのを例外に、第５部と第６部とは写本自体がいまだに発見されず、第３部と第４部とは写本の状態のまま放置されてきた。これは、オスマン史研究者が文書史料が急増する中期以降にその関心を集中したことが原因の一つとなっていると思われる。さらに、第３部と第４部とはオスマン帝国がコンスタンティノープルを征服する以前を対象とし、特に第４部は、ティムールに敗れて帝国を一時瓦解させたバヤズィト１世の時代を扱っているため、トルコ人研究者によってその重要性が過小評価されてきたことも、これが無視ないし軽視されてきた一因であると思われる。しかし、すでに今澤氏本人がこれまでに公表した論文によってもその一端が明らかにされたとおり、第４部が扱っているバヤズィト１世の時代は、その後のオスマン帝国の発展を理解する上で極めて重要な時代である。この時代を全体として評価し直すという観点からも、「ケマルパシャザーデ・ターリヒ」第４部を写本のままに放置すべきでないことは明らかなのである。

こうして本論文は、当年代記の研究にとりかかる。まず現存する３種の写本を詳細に検討し、底本とすべきものを決定する。次いでこの年代記の作者が史料源としたものについて考察する。「ネシュリー・ターリヒ」、無名氏による「オスマン王家の歴史」、「オルチ・ターリヒ」、「ルーヒー・ターリヒ」、「タクヴィーム」について、刊本のみならず、各地に分散する写本のテキストにもあたって比較検討を行なったこの考察は、詳細を極め、これだけで、初期オスマン史に関する諸史料の系統に関する、精度の高い優れた研究となっている。さらにその後、ペルシア語による年代記「八つの天国」の写本も含めた諸史料や関連する研究を博捜し、その結果、当年代記第４部が、バヤジト１世時代に関する独自の

情報をも多く含んだ、したがって初期オスマン史を研究する上で欠かすことのできない重要史料であることが明らかとなった。

ついで本論文はその核心である校訂と注釈部分にはいる。校訂は慎重かつ正確に行なわれ、3写本間の異同についての注記にも細心の注意が払われている。また、転写の方法については、ローマ字表記からもとのアラビア文字が復元できるようなシステムが採用されており、このシステムに基づく転写には、今澤氏の文献学的造詣の深さが如実に表われている。さらに、オスマン・トルコ語の枢要な構成要素であるペルシア語とアラビア語に関する今澤氏の知識が十分であることも、テキスト確定の過程から窺うことができ、テキストの確定は十全に説得的である。また注釈に関しては、必要かつ十分で詳細な注記が施されており、ここからは、ビザンツ史料をも含む当該時期の諸史料と周辺地域の歴史及びそれらに関する研究について、今澤氏が十分な研鑽を積み、深い知識を身に付けていることが理解でき、審査委員全員から高い評価を受けた。

このように本論文は、「ケマルパシャザーデ・ターリヒ」第4部が、初期オスマン朝史研究にとって第一級の史料であることを明らかとし、その上で信頼できる校訂版を学界に提供し、さらにバヤズィト1世時代に関する多くの新知見を付け加えた重要な研究であり、今後長く学界を裨益してゆくことは疑いない。したがって、その学問的価値は非常に高いと評価された。

以上のような評価と並んで、最終試験においては概ね以下のような意見が提起された。

まず、本報告冒頭部で記された、当年代記の史料的価値と、これを校訂することの意義、さらに、今澤氏の構想する研究全体の中で、この校訂がいかなる位置を占めているかについて、本論文中において、より詳細に説明し、強調してもよかったのではないかとの意見が述べられた。本論文が、オスマン史家、特に初期オスマン史を研究対象とする研究者を念頭に置いて書かれているため、研究史における本論文の価値が、専門外の読者にはやや判りづらいように思われた。さらに、史料源についての議論の詳細さに若干精粗のばらつきがあるのではないかとの意見も出された。しかし、これらの点については、最終試験の場において、今澤氏自身から具体的な説明があり、審査委員全員の理解がえられた。この点をはじめ、各委員から出された個別具体的・専門的な質問に対する今澤氏の回答はいずれも明快であり、これは、氏のオスマン史並びにオスマン文献学に関する学識の深さのあらわれであると理解された。

提起されたその他の意見・質問の主なものは、以下のようであった。

1. 現存する写本が3種であることが、どのような手続きによって確証されるのか。
2. 「八つの天国」の現在における評価はどのようなものか。
3. テキスト中に挿入されているトルコ語及びペルシア語韻文にも、歴史学的に意義の

ある情報が盛られているか。

4. 「ルーヒー・ターリヒ」の、史料源としての重要性を確定できる記述が、本論文中に記された例以外には存在しないのか。

5. ケマルパシャザーデによる「独自の情報」は、本論文で挙げられているもの以外には存在しないのか。

6. **Akıncı, Dizdar, Ümera** 及び**Voivoda** の日本語訳として「ウジベイ」、「城主」、「エミールたち」、及び「太守」は適切であるのか。

7. コソヴォの戦いでセルビア王ラザールの王子が戦死したという史料記述を、今澤氏が「誤りである」と断定した根拠は何か。

8. コンスタンティノープルの建設者とされる伝説上の人物**Yānḳō bin Mādiyān**の由来について、より詳細に説明できないか。

9. 校訂の方法に関し、**shadda, fatḥa, sukūn** 等の記号も、すべて底本とした写本に基づいてつけられたのか。

10. アラビア語史料の校訂に際しては、アラビア文字wāwは決して行末に置かれないが、オスマン・トルコ語の場合はどうなのか。

次いで、テキストのローマ字転写法について若干の疑義が提起された。これに対し、今澤氏から、テキストを確定する際、校訂者がテキストをどう読んだのかを明示するために転写を併記する必要があること、しかし、オスマン・トルコ語の転写法については、世界的に汎用される共通ルールがいまだに確立されておらず、各研究者がそれぞれの方法をもって転写を行なっている状況にあることが説明され、今澤氏はあくまで転写されたローマ字からもとのアラビア文字を正しく復元しうる方法を原則として採用した旨回答がなされた。これは、研究の現状に鑑みれば、一つの賢明な選択であったと思われる。

以上のような意見・指摘があったにもかかわらず、本論文がオスマン史研究にとり、これを大きく発展させるための重要な基礎を築いた、大きな貢献であることには変わりはなく、今後初期オスマン史の研究者は例外なく今澤氏の研究を利用し、またこれを出発点とするであろうことは、疑いない。また、今澤氏自身が、今後バヤズィト１世時代を中心に初期オスマン史の再構築を試みるためにも、本論文が重要な基礎となることもまた、確実である。若干の字句の訂正や補足を必要とする部分も存在するが、それらは直ちに修正可能なものであり、本論文の本質的な価値を揺るがすものとは考えられない。以上により、審査委員会は全員一致で、本論文が博士の学位を授与するにふさわしいものであると判定した。